
スペースチャンバラNo.1

ゴッドスピードはやかぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペースチャンバラNo. 1

【Nコード】

N2419Y

【作者名】

ゴッドスピードはやかぜ

【あらすじ】

無限に広がる大銀河。人類は幾多の困難を超え、星々を征服して行った。後に「黄金の時代」と呼ばれる時代である。だが光ある所、影が絶える事はない。辺境の開拓惑星に悪漢「ディメンションモヒカン」の魔の手が迫る。かき鳴らされるサンダーエレキギターは殺戮の協奏曲。しかし、悪漢どもにスペースブルースが待ったをかける。ボンクラ系ハードボイルドチャンバラアクション、ここに開幕。arcadia様にも投稿しています。

無頼、来る

惑星KL-38の空はいつも赤茶けている。見渡す限りどこまでも広がる荒野は、クラリスの気持ちを暗く落ち込ませてくれた。

今日も朝から村の外れにある森で、薬草を探しに行かなければならない。珪素樹の赤い堅い皮を超硬化プログナイフで剥ぎ取って薬草を集めるのは、クラリスの細腕では辛い。

幹はクラリスの腰より細いくせに、宇宙的エネルギーを取り込んで成長する珪素樹は飛来する隕石を受け止めて平然としている程の頑丈さだ。

木々の生える密度は視線がかなり先まで通る程度だが、足元は根が張り巡らされているせいでひどく歩きにくい。

火花を散らすナイフをゆっくり珪素樹に押し込んで行く。力加減を間違えばナイフが折れる。一瞬も気が抜けない。

珪素樹の表皮をえぐり取るように切り開くと、びっしりと生えたコバルトブルーのカビによく似た薬草が見つかった。

一日でほんの小指の先くらいの量を集められればいい方だが、今日は当たりを引いたらしい。

ナイフの高振動機能をオフにして、クラリスは薬草を削ぎ落とし始める。当たりを引いても、嬉しくはない。

力はいらないが、今度は細かすぎて精神的に疲れてくる。息を止め、クラリスはシャーレ型密封容器に薬草を集めていった。

このうんざりするような仕事を明日もしているだろう。一年後も、十年後も。きつと、死ぬまで。

代わり映えのしない人生は、クラリスに重苦しい倦怠を感じさせていた。

きつと交易惑星のような大都市に行けば、村一番の器量よしであ

る自分は華やかな世界に行けるはずだ。　しかし、両親がそれを許してはくれない。

いっそ村が無くなってしまえばいい。　クラリスは思った。

「やあ、お嬢さん」

クラリスの視界の外に一人の男が立っていた。　人が隠れられるほどの太さはない珪素樹の影から、ぬっと顔を出す彼の頭には天を割らんとするばかりのモヒカンが生えている。　視界に入っていないかっただとはいえ、宇宙動物を避けるためのポータブル動体センサーは持っている。

しかし、頼りになるはずのポータブル動体センサーは、何の反応も示さなかった。

「こ、こんにちは……」

森や山で会えば挨拶をするのは礼儀である。　しかし、それは平地の礼儀とは意味合いが違う。

助けが来ない場所で知らない誰かに襲われるのは、死を意味するだろう。　法も倫理も届かない場所だ。

つまり、森や山での挨拶は「私はあなたに危害を加えません」という表明なのである。

故に、

「こんな所で女の子一人で歩いてちゃあ、危ないぜえ？」

危険なモヒカンは挨拶などしないのだ。

「そうだぜ、俺らが送って行ってやるぜ」

「ひいっ!？」

背後から突然、聞こえた声に振り向けば、また別のモヒカンが立っていた。汚らわしい欲望をクラリスにぶつけようと、いやらしい笑いを浮かべるモヒカンはクラリスの恐怖を煽る。

「いい事言うじゃねえか、兄弟。俺達が連れて行ってやるよ……
……天国になあ！」

「いやあ！」

クラリスは走った。この恐ろしいモヒカン達に捕まった末路など考えたくもない。どちらに行くと考えた訳ではなく、ただモヒカンのいない方向へと走った。
しかし、

「ヒュー！ 情熱的だねえ」

気付けば、男のむさ苦しい汗と凄まじい垢の臭いに包まれていた。正面に立っていたモヒカンの胸に飛び込んでいる自分を発見したクラリスは、一つの噂を思い出した。

「まさか……あなた達はデイメンションモヒカン!？」

「おっと、俺達も有名になったもんだな」

「まったくだな、兄弟！」

ゲラゲラと笑う彼らは近隣の星系を荒らす、名が売れ始めている星賊団であった。

最新型の二次元跳躍装置を用い、何人もの星間カウボーイ達を返り討ちにしている。逃げようとしたクラリスがデイメンションモヒカンの胸に飛び込んだのは、二次元跳躍で先回りしたためだろう。あらかじめ二次元の写真などに収めた場所になら、跳躍が出来るのだ。僅かなタイムラグで条件次第ではキロ単位で飛べる。つまり、クラリスはどれだけ走ろうと、モヒカンからは逃げられない。

「あ、ああ……！」

「その嫌そうな顔が可愛いねえ」

「兄弟はマジで外道だな！」

「おいおい、それはお前もだろ、兄弟」

「違いねえや！」

ナイフを取り出す事も忘れ、クラリスは震えていた。ただの乙女が、このような恐るべき悪漢に立ち向かえるはずはあるまい。

「いやああああああ！」

悲鳴を上げるクラリスに、モヒカン達はごくりと唾を飲んだ。地面に突き飛ばされたクラリスは、にじりよるモヒカン達に脅えるだけだ。

虚しさを覚えるほどの平穏は、もはや乙女の手から零れ落ちてしまったのか？

「おうおうおう！」

しかし、乙女の声に応える者達がいる。

威勢のいい、しかし、ニワトリが鳴いているかのような甲高い声。真っ青な布地にピンクの桜が咲いている。抗磁場アロハを身にまとい、気合いの入ったリーゼント。ひどいガニ股で現れた男は、どこからどう見ても、

「てめえ、どこのチンピラだコラァ！」

「誰がチンピラだ！ てめえマジ調子くれてっと、チョーパンきめっぞ？ あ？」

まごうことなきチンピラであった。クラリスの胸に、再び絶望が蘇る。

相手は悪名高きデイメンションモヒカン。助けに来てくれたナイトはリーゼントのチンピラ。しかも、十八のクラリスより幼い顔つきをしている。

剥き出しの二の腕には、それなりに筋肉が付いているが、腕力やちよっとしたレーザーガン程度では、デイメンションモヒカン相手

では話にならない。

どう考えても詰んでいる。

「てめえみてえに無頼の仁義を知らねえたこ助にや、この」

「黙ってろ、サブ」

何事かを喚こうとしたリーゼントが黙った。それどころかモヒカン達の空気が変わった。それは緊張の一語。

たった一言で空気を変えた男は、悠然と現れた。怒りも喜びも苦しみも、クラリスは彼から感じられない。

黒染めの着流し。懷に右手を突っ込み、彼は現れた。着物にスペーステンガロンハット。

これほど不似合いな組み合わせはないだろう。が、この男には不思議と似合う。

「で、でもよ、兄ィ！ 俺はこいつらに仁義ってやつを教えてやるうと！」

「サブ」

喚くニワトリは、ただの一言で動きを止めた。

「俺は黙ってろと言った」

場が、男の色に染まった。スペーステンガロンハットに隠れて目元が見えないが、その口元には笑いも怒りもない。まるで静かな湖面の如く。刻まれた皺は、深い。

「サブ、覚えておけ」

「へい」

「こいつらは無頼じゃねえ」

音は、しなかった。

腰にぶち込まれていた刀が、じっと男を見ていたはずのクラリスもわからない内に、鞘から抜かれていた。

「こいつらはただの野良犬だ。 野良犬に仁義は通じねえ」

男は言った。

「斬るしかねえんだよ」

デイメンションモヒカンを前に、男は何ら気負いを見せない。見せる必要もない。

星渡りクジラがフルフラットハイエナに脅える理由があるだろうか？

クラリスの心に、希望が蘇った。

モヒカン達は吞まれていた。自信満々に取り出した刀が、ただの刀のほうはない。

恐らくディメンションモヒカンだとわかった上で出てきた相手だろう。二次元跳躍装置への対策をしていないはずがない。

『まだか、兄弟!』

『待てよ、もう少しで解析が終わる!』

思考を八千倍に加速するフラッシュシステムと、八千倍に加速した思考を他者に正確に伝えるシンクロプランターを併用し、モヒカン達は必死に打開策を考える。

彼らとて百戦錬磨の悪漢。知恵の足りぬただの猪から死んで行く世界だ。生き延びてこられたのは、情報を得てきたからだ。

八千倍の思考の中、のたのたと動く男。その動きは全身を義体化している星間カウボーイ達に比べれば、遥かに遅い。

しかし、その動きがブラフでないとは誰が言える？

『まだか!?!』

普段よりも遅い相方の解析を、今か今かと待ちながらモヒカンは叫んだ。普段なら八千倍の体感時間の一秒で終わる解析が、終わらない。

『出たぜ!』

相方のモヒカンの義眼が鈍く輝くのを、頭部に設置されたモヒカン型リーダーが捉えた。

『結果は』

『あれは……鉄だ!』

『……………は?』

鉄とは何だったろうかと、モヒカンは一瞬考える。このご時世、鉄などという軟弱な鉱物を使っている加工品などは存在していない。

ご家庭で使われている分子結合阻害包丁にすら使われていないだろう。鉄などではモヒカン達のトゲ付き肩パッドすら斬れはしない。

『なんだよ、兄弟! ビビって損したじゃねえか!?』

『まったくだ、兄弟! 二次元跳躍するまでもないぜ』

モヒカン達はレーザーガンを男に向けた。自動照準機能がコンマ以下の時間で照準を合わせる。

『これにくたばりやがれ!』

思考トリガーがレーザーガンのハイパーニュートリノを励起させ、銃口から思考加速されたモヒカン達でも義眼でも知覚出来ないほどの速度でレーザーが発射され――

『お?』

『なあ、兄弟。俺のレーザーガン、故障してるみたいなんだ。トリガー引いても弾が出ねえよ』

『俺もだ、兄弟。くそつ、ポンコツ掴ませられたか!』

レーザーガンが発射されれば、男はミンチよりひどい有り様になるだろう。男はレーザーガンすら防ぐ装備を持っていない。つまり、レーザーガンは故障している。

それは道理である。

『仕方ねえなあ。俺が二次元跳躍して、ぶん殴ってくるぜ』

『頼むよ、兄弟。俺はレーザーガンを検査するからよ』

モヒカン型リーダーにより、レーザーガンの内部を走査するためにモヒカンは男から視線を外した。

男はモヒカン達を倒せる装備を持っていない。反撃を受けても問題ない。

つまり、レーザーガンの故障をゆっくり確認しても問題ない。

それも道理である。

「たわばっ!？」

血の臭いがした。

外した視線を男に戻してみれば、

「兄弟!？」

真っ二つであった。

脳天から股下まで、永遠に断ち割られた相方がすぱりと斬り捨てられている。

「てめえ、何しやがった!？」

「あ？ 兄ィが斬っただけだろうが！」

「黙れ、サブ」

斬った？ ただの鉄、せいぜい炭素が混合されただけの化石レベルの刀で？ あんな物では下手をすれば、ただの布すら斬れない。

しかし、そのただの鉄で斬った。斬られた相方の身体が転がっている。斬れるはずのない物が斬れては、道理が通らない。

「何かすげえ秘密兵器を隠してやがるな……」

その秘密兵器は恐らく射程距離は短いのだろう。そうでなければ、すでに自分もやられている。

近付くわけにはいかない。そう判断したモヒカン作戦を変えた。

「おい、待てよ。ちょっと話を聞いてくれないか？」

「……なんだ」

ゆっくりと近付いてきていた男が足を止めた。刀を上段に構える男の姿は、あの刀が秘密兵器を隠すフェイクだと見抜いているモヒカンの背筋にすら、冷たい汗を流させるほど堂に入っている。

「いやさ……」

モヒカンは僅かに爪先を上げた。

「食らえ、ティンダロスハウンド！」

宇宙を征服した人類は別の次元にすら足を延ばしていた。その中で発見されたティンダロスの獵犬を調教した物がこれである。

鋭角から自在に飛び出す猛犬の鋭い牙は、さながらブラックホールのように全てを噛み砕く事だろう。

しかし、

「小賢しいんだよ」

モヒカンの足元から、疾風のように飛び出したティンダロスハウンドも、哀れ真つ二つ。

加速された知覚と、レーザーガンの弾丸にすら反応する高性能のレーダーでも捉えきれない何かが、ティンダロスハウンドの身を断ち斬ってていた。

「な、なんなんだよ、てめえは……！？」

そして、その一撃はモヒカンの意志も断ち斬る。血に濡れた刀をぶら下げ、モヒカンに一步、また一步と近付いて来る姿は、もはやモヒカンがまだ無垢な子供だった頃、おばあちゃんに話してもらった悪魔にしか見えぬ。

「やめろよ……来るな……！？」

「悪党なら、悪党の仁義を通しな」

腰が抜けたモヒカンの前に、男が立った。再び上段に構えられ

た刀。振り下ろされる刀が、モヒカンには見えた。

「あ、本当にただ刀を振っていただけなんだ」

と、得心した時には、すでに斬られた後。

全ての道理を、男は斬り捨てた。

無頼、来る（後書き）

用語解説。

・二次元跳躍装置

二次元を媒体とし、特殊な粒子を用いる事により一時的に自らを二・五次元に落とし込み、二次元に収められた任意の地点に跳躍する。

なお、光速を超える事に成功した人類ではあるが二次元に入る事は成功していない。

・ティンダロスハウンド。

ティンダロスの猟犬を家畜化した物。　さまざまな犬種と掛け合わされた結果、見た目は極普通の犬。

しかし、身体のだこかに鋭角を作れば、そこから出現させられる高い奇襲性と鋭い牙は、かなり使い勝手がいい。

わんこの癒し系と暗器としての利便性はアウトロー達の間でブームを巻き起こしている。

なお今回、使われたのは野生のティンダロスの猟犬とは違い、出現時に色々なハーブの香りがするティンダロスハウンド・ハーブ。

・デイメンションモヒカン

ヒヤッハー！

義務と人情

元は筋骨隆々の大男であっただろう彼も時の流れの前には無力。今は背は曲がり、骨に皮がへばり付いているかのような老醜を晒している。

「帰ってもらえ」

しかし、そんな骨と皮から発せられたのは、取り違えのしようがない明確な拒絶だった。

「ちょっと待ってよ、村長!？」

強靱な珪素樹の皮を加工して作られた家は頑丈ではあるが、大きく作るには手間がかかりすぎる。それは村長の家も変わらない。居間も人が五人も集まれば、立っていなければならないような狭さだ。

そんな中、クラリスの金切り声に晒された村長は心底、憎々しげな表情を見せた。

「やかましいわ、小娘が」

「だ、だって私がデイメンションモヒカンに襲われてる所を助けてもらったんだよ!？ 恩人なんだから、お礼に一晩泊めてあげたいって言うてるだけで……」

今も村の入り口で二人の男が待っているだろう。 命を助けられたのだ。

その事に礼をするのは人の道理。 村長がいい顔をして村を挙げ

て歓迎してくれる、とまでは思っていなかった。

しかし、それでもクラリスの家に泊めるくらいは快く許してくれると考えて―――信じていた。

クラリスは生まれ育った村が嫌いだ。

「お前は本当に余計な事をする娘だの」

聞きたくなかった。

「旅人なんて奴らは盗っ人しかおらん！ そんな奴らを村に置いて
みい。 わしらの蓄え、みいんな持ってかれちまうわ！」

恩人を口汚く罵る言葉なんて、聞きたくない。

どこから出てくるのか不思議に思うほどの罵詈雑言が、村長の歯
が減った口から勢いよく飛び出してくる。

「大体、相手はデイメンションモヒカンだったんだろう？」

「……はい」

恩人のためには言い返さなければならぬ。 しかし、言葉が溢
れてくる以上に涙が溢れてきそうになるのを、クラリスは必死に抑
えなければならなかった。

「馬鹿が！ この馬鹿娘が！ デイメンションモヒカンに手を出し
たら、必ず復讐に来るぞ！ わしら皆殺しにされてしまうわ！」

村長に報告してからずっとこの調子だった。 クラリスはこの村
で生まれた。

クラリスと名前を付けてくれたのは村長その人だ。

その人に、

「村長……私がモヒカンに殺されてた方がよかったの!？」

「お前のような馬鹿一人で村が救われるなら、その方が良かったわ!
死ね! 今から死んでこい!」

死ねと心から罵られる。

クラリスは村を愛していない。自分ではそう思っていた。
もし村を出て行くなら罵られるのは覚悟の上だ。そんな物は聞き流してしまえば、次の瞬間には忘れられると思っていた。

それでも心が、軋みを上げている。

「おじいちゃん……!」

「何がおじいちゃんだ、白々しい! この疫病神が! まったく……
……そうやって情に訴えようなど、お前は恐ろしい売女よな」

優しかった。

幼かったクラリスの頭を撫でてくれたおじいちゃんを、覚えている。

しかし、目の前にいる村長と、おじいちゃんがクラリスの中で、
どうしても結びつかない。

退屈で、それでも優しかった世界は、今はもうどこにもない。

「私、何も悪い事なんてしてない……!」

涙が決壊し、クラリスの頬を濡らす。ただクラリスは仕事をし

ていただけだ。

真面目ではなかったかもしれない。やる気なんてなかった。それでも死ねと言われる理由はないはずだ。

「お前が」

死ねば何の問題も無かった。生きてる事が悪い。
次の言葉を、聞きたくない。

どかん、と音を立てて、閉ざされていた扉が開いた。

「おうおうおうおう！」

威勢のいい、しかし、ニワトリが鳴いているかのような甲高い声。
真っ青な布地にピンクの桜が咲いている。抗磁場アロハを身に
まとい、気合いの入ったリーゼント。ひどいガニ股で現れた男。

「サ、サブさん!？」

「誰じゃ、貴様は!？」

「やかましい!」

村長とクラリスの声を、サブはぶったぎった。

「黙って聞いてりゃあ、いい気になりやがって! いいか、俺と兄
イを追い出す気持ちはよくわかる。誰だって盗賊は怖えよ」

でもな、とサブは言葉を切ると村長を睨み付けた。それは子供
が必死に怒っているようにしか、クラリスには思えなかった。

「女ア、泣かしちゃあいけないだろうよ!？ そいつは無頼の仁義
ですらねえ、男の生き方だろうよ!」

しかし、その子供の怒りは、確かにクラリスの胸に届いた。

サブの純粹な怒りは、まだクラリスの胸の内に言葉を作ってはく
れない。だが、それでもクラリスの傷付いた心を守ってくれた。

「や、や、やかましいわ、この腐れ鳥頭が! お前のような余所者
が、わしらの気持ちがるのか! わしはこの村を守らにゃあな
らんのだ!」

「わしら、じゃねえだろうがよ! お偉いわし様は要するに、あの
モヒカン共にビビってるだけだろ? 自分がビビってんのを他の連
中を出汁にして、調子くれてんじゃねえぞ!」

クラリスの胸中とはかく、売り言葉に買い言葉。このままで
は遠からぬうちに決定的な破綻が訪れるだろう。

恩人と村人達が争う事に、

「黙ってろ、サブ」

ならなかった。

場が、静まり返った。

いつの間にやら戸口に男が現れている。着流しは旅塵に汚れてはいるが、男の発する気は強烈なまでに清廉。

「上がらせてもらうぜ」

家の中に上がるという事で、男はスペースステンガロンハットを脱ぐ。クラリスはそれを意外な想いで見た。

彼を礼を知らぬ野蠻人と思っていたわけではない。彼の頭の上から、スペースステンガロンハットが消えた事が不思議に思えただけなのだ。

それだけスペースステンガロンハットは、彼の頭の上に馴染んでいた。

「兄ィ、でもよ!」

「サブ」

黙っている、とは言わなかった。

「飲み込め」

とだけ、彼は言った。

「……………!」

歯を食いしばり、俯くサブに声をかけてやりたかった。

クラリスの身を守ってくれたのは男だ。でも、あなたのお陰で私の心は守られた。そう言ってやりたかった。

しかし、ぐっと全てを飲み込もうとするサブに声をかけるのは、二人の大事な何かに踏み込んでしまいそうで、クラリスも言葉を飲み込む。飲み込もうとした。

それは、とても苦い味がした。

「水と、飯だけ分けてくれ。金なら払う」

サブとクラリスをいない物のように、淡々と男は村長に声をかける。

「……駄目だ。あんたに恨みはないが、デイメンションモヒカンに目を付けられるわけにはいかん」

男の気は百戦錬磨のモヒカン達を怯えさせた。しかし、それほどの気を受けながらも、村長は膝を屈しない。

怯えながら、だが、しっかりと男の顔を見て、言った。

毒と虚飾を剥ぎ取られた村長の顔に、何かとても硬い想いが乗っていた。

「そうか」

それだけを言うと、男は再びスペースステンガロンハットを被り、背を向ける。

「行くぞ、サブ」

「……へい」

普段なら何事か言い返すであろうサブも、大人しく男の後に続いて外に出ようとしている。

あまりの流れの早さに、クラリスが呆けた時である。

「クラリス」

「は、はい……」

また村長から何か罵られるのだろうか、と僅かに身構えた。

「年を取ったのか、眠くなっていかなの。ちょっと五分ほど寝ようかのう。そういえば台所にモグの実、漬けたのがあったはずなんじゃが、食べたか忘れちゃったのう。年は取りたくないのう」

酷い演技であった。

しかし、男の清廉な気に清められたのか、その顔にはさっきまでの毒が抜けている。

どこか、清々しい顔をしていた。

「ありがとう、おじいちゃん」

そう口の中だけで言うのと、クラリスは走り出した。

「待って！」

と、クラリスは男達の背に向けて叫んだ。

手に抱えるモグの実の漬け物は、クラリスの細腕にはずっしりと

来る。

しかし、離すつもりなんてない。しっかりと抱き締めて、クリスは走った。

「お願い、待って！」

二人は振り返らない。

狭い村だ。すでに彼らは安っぽい柵に囲まれただけの村の出入り口に差し掛かっていた。

「待って！」

追い付いて、何を言おう。まずは謝ろう。おじいちゃんが失礼な事を言ってごめんなさい、と。そして、モグの実を渡すんだ。おじいちゃんの漬けたモグの実は、すごく美味しいからあの人達だって、きっとおじいちゃんを許してくれるはずだ。

そうしたら、もう一度ごめんなさいって言って、助けてくれたお礼にありがとうって言おう。

「あれ？」

どうして目の前に地面が見えるんだろう、とクラリスが気付いた時、熱を感じた。

「大丈夫か！？　しっかりしろ！」

「サブ、さん……？」

リーゼントが、そこにいた。　いつの間にかサブに抱き起こされている自分に気付く。

「……あれ？」

熱を感じた。

背後から、熱を感じた。

「あれ……？」

クラリスは振り返った。

「おじい、ちゃんの……お家は？」

炎が、そこにあつた。

轟々と燃え盛る炎だけが、そこにはあつた。

もう、そこには何もない。　思い出も、分かり合えたという想いも、何もない。

「ヒュー！」

炎の中に人影一つ。　場にそぐわぬ口笛一つ。　陽気な悪鬼が只今、登場。

「なんだいなんだい、湿気たツラした奴らばっかじゃねーの」

両の肩パッドからズガンと勢いよく伸びる棘。　サイバーエレキ

ネズミの皮で作られた派手な黄色のジャケット。

ほっそりとした顔の半分に、紅一色の仮面。

そして、何より目につくのは頭の上のモヒカン
毒々しい緑のモヒカンが三本、立っていた。

「あ、あれは……！？」

何事かと出てきた村人が言った。　いつもクラリスにちよつかいを出すフランクリン。　馬鹿で相手にしたくもない。

「トライモヒカンのスライム・ザ・リッパー！？」

そんな馬鹿でもディメンションモヒカンの首領、スライム・ザ・リッパーの顔と名くらいは知っている。

「ヒャッハー！ こんなクソド田舎でも俺様の名前を知ってるとはなあ！ ……でもよ、てめえ」

いつ抜いたのか、スライムの手レーザーガンが握られていた。

「様を付けろよ、様をよオオオオオオ！」

レーザーガンが獰猛な唸りを上げ、フランクリンの首から上が一瞬にして吹き飛ば、断面から吹き上がる血がスライムに降り注ぐ。鮮血のシャワーを浴びながら、スライムは満面の笑みと共に言った。

「お、いいねえ。クソの割にやなかなかいい演出してくれんじやねえか。つー事でよく聞け、クソ村人共！」

物陰からスライムを狙おうとしていた村人が、スライムのレーザーガンに撃ち抜かれる。

「俺が！」

また一人。

「俺が！」

二人。

「こおおおの俺様が！」

三人。

村人達の抵抗は今、終わった。

「スライム！ ザ！ リツパー様だ！」

スライムの背後に音もなく、二次元跳躍で現れたモヒカン、その数―――百。

「万雷の拍手で迎えろ、クソ共」

義務と人情（後書き）

用語解説

・モグの実

実と呼ばれているが、いつの間にか地面に落ちている。地下を掘っても何も見つからない。

大人一抱え分はある巨大な実は、生で食べると腐った肉のような味がするが、タレに漬けて臭みを抜くと白身魚の味がする。

モグの実の漬け物は簡単に作れるが、作り手の腕がはつきりと出してしまう。

村長の漬け物は醤油の香ばしさに、ほんの少しだけ効いた唐辛子。クラリスはこれがあれば、ご飯三杯いける。

斬・剣・Rock

「よし、駄モヒカン共」

スライムのトライモヒカンは雄々しくギンギンに逆立っている。
このハードでスタイリッシュなモヒカンに比べれば、ただのモヒ
カンはしなびたハイスイート人参でしかない。

村人達の抵抗を食らい尽くしたスライムは右手を高らかと上げた。
その人差し指は真っ直ぐと天を突く。

銀河に悪名高きスライム・ザ・リッパー。彼の前に立って、生
き残った者はいない。

そして、駄モヒカンとは言え、その数は百。
最新鋭の装備に身を包んだ彼らの戦闘力は、この村を飲み込んで
もお釣りが来るだろう。

その恐るべき野獣どもが解放されるのかと村人の心に恐怖が宿る。
観衆のハートをがっちり掴んだスライムは、高らかに叫んだ。

「レエエエエエエツつつつ！……ロック！！！」

百のモヒカン達が一斉に動く。サンダーエレキギター、オン・
ザ・ベース、ルートルードドラム。

「聞けよ、クソ村人どもオ！これが！」

ルートルートドラムが三十。 思い思いにバラバラのリズムを刻み始める。

「これが！」

オン・ザ・ベースが三十。 情熱的な独りよがりだが、ルートルートドラムと聞くに耐えない不協和音を作る。

「俺様達！」

サンダーエレキギター四十。 爆発的な轟音は、うっかり逃げ遅れていたマヌケの鼓膜を破裂させる。

「デiiiiiiiiメンション！ モヒカンだッ！」

百のバンドを上回る炎のシャウトは、村人達の魂魄を震わせる。恐怖と狂乱にて震わせる。

それはまさにスライム、魂の爆発。 ハードなウェーブ。しかし、

「うるせえ」

スライムの爆発では無頼の魂を震わせるには足りぬ。 いつの間にやら現れたスペーステンガロンハットが一振りすれば、スライムの脳天から股下までを一直線に断ち割った。

それはまさに神速という名が相応しい。 抵抗一つさせぬ一撃は、スライムの顔に絶叫を貼り付けたまま斬り捨てた。

外道、死すべし。

刀がきらりと陽光を照り返せば、スライムの首が落ちる。

きらり、きらりと右腕、左腕。 目にも止まらぬ技の冴えはスラ

イムが地に倒れるまでに、七度振られた。

首から胴までを輪切りにされたスライムは、音を立てて地に落ちる。

これでディメンションモヒカンは壊滅した———というにはまだ早い。

モヒカン達のギグが止まらぬ。溢れる獣性を発散するかのよう
に、無軌道なパッションが鳴り響く。

音ではなく、直接的な振動としか感じられない音の世界は、スライムの身体を震わせる。

「アハーン」

斬り刻まれたはずのスライムの頭から、轟音の中でもやたらと通る声。音に震えるスライムの身体が、まるで水にでもなったかのように溶け出すと、再び一カ所に集まり出した。

「おいおいおいおい、ギグにクソ観客が上がったら駄目だろうが」

集まった粘性のある水が一つになれば、まるで何も無かったかのように起き上がるスライム。それを一匹の無頼はじっと見つめた。一体これは如何なる魔技か。斬られれば死ぬ。当たり前前の道理を平然と踏みにじるスライム・ザ・リッパーを前に、無頼は一体どう立ち向かうのか。

「カカカカカカカ！」

再び斬りかかる無頼の刃は、正しくスライムを開きへと変えた。
しかし、耳障りな笑い声は消えず。

「無駄だ、無駄！ 俺様の名はスライム・ザ・リッパー！ 刃物殺

しのスライム・ザ・リッパー様だ!」

どれだけ斬られようと、その身体は再び集まり、一つになる。

まさに名は体を表す。

軟体のスライム、刃物殺しのリッパー。斬られながら無頼へと、どこからか取り出したレーザーガンを撃ち込む余裕すらある。

レーザーガンを避け、斬りながらも無頼はさすがにこれは攻めあぐむ。

何せ斬っても死なぬ不死身の身体である。刀一本でどうしろというのか。

「ただのクソ刀一本で俺を殺せると思ってんのか、このクソ侍さんよォ!？」

右腕、左腕にレーザーガンを一丁ずつ。斬れども斬れども生えてくる。それどころかスライムの首の後ろから、もう一本の腕が生えてきたではないか。無論、その手にはレーザーガンが握られている。

それどころか、スライムの身体から水の触手が何本も伸び、その先端にはレーザーガン。前と左右から、光線が次々と無頼へと放たれるではないか。

これには無頼も参ったのか、後方に大きく跳ねる。

距離を取り、右へ左へレーザーガンを軽やかに避ける無頼にとって、百や二百はレーザーを何とかするのは容易い。

しかし、スライムを斬れぬというのであれば先の見えない千日手である。それどころか体力が尽き、僅かでも動きを止めてしまえば、煌めく光線にその身を貫かれる事となるだろう。

「少し、口を閉じろ」

その絶体絶命の死地の中、スペーステンガロンハットは揺るがなかった。

それどころかスライムの正面に、何の躊躇も小細工もなく、愚直に前に出た。

コンマ一秒の間に、全方位から放たれる光速のレーザーは十二。一秒で百二十。

その全てを避け、再びスライムの前に踏み込んだ。

「無駄だってーの！」

「知るか」

縦に一斬、横に一斬。スライムの身体を十文字に斬り裂くが、そんな物でスライムの口は動きを止める事はない。

「知れよ、このクソクソクソクソク侍よオオオオオ！？ てめえのクソ刀に百回斬られようと、二百回斬られようと何の意味もねえんだよ！」

「なら千回斬るか」

「はあ！？」

スライムでなくとも唾然とするしかあるまい。斬っても斬っても殺せぬ魔人を如何に攻略するか。

その答えは単純明快。

「死ぬまで叩き斬ってやるよ」

斬れぬ魔神を前に、きっぱりと言い切った。

「兄ィ！ マジ渋いっす！」

「サブ」

スライムの前で、無頼は足を止めた。降り注ぐレーザーの雨は体捌きで避け、着流しの裾に掠らせもしない。

「黙ってろ」

刀が、疾った。

背後に控える百の駄モヒカン達の百のモヒカンレーザーが並列化し、一のレーザーの能力の数千倍にまで高める。光の粒子すら数えられるほどだろう。

しかし、その高まったレーザーの能力をもってしても無頼が何度、刀を振ったか捉えきれなかった。

地面に水を叩きつけたかのように、斬り刻まれ過ぎて破裂したようにすら見えるスライム。

「シッ」

しかし、それでも終わらぬ。

僅かに息を吐くと第二段の剣舞。一段目の処理が終わらない内に、再び大量のデータを叩き込まれたモヒカン達のモヒカンレーザーが爆発を起こした。

「シッ」

「てめえ……！？」

三段。 とつくの昔に三百など超えた。

「シッ」

「クソふざけんな!？」

四段。 無頼の身体から赤い煙が上がり始める。 あまりの速度に体温が急上昇し、体内の血液が沸騰し始めているのだ。

「シッ」

「おい、おいおいおいおい!？」

「シッ」

「待てよ!？ このままじゃエネルギーが尽きちまう!？」

「シッ」

「クソっ! あり得ねえだろ!？ 最新鋭の人体変換装置だぞ!？ それを」

八、九、十段。

「ただ斬るだけでぶっ潰すとかよオオオオオ!？」

朝霧よりも細かく叩き斬られたスライムは、もはや風に吹かれて消えるのみ。

一度、刀を振るい、穢れを払う。あまりの酷使にあちこちが破裂し、断裂した身体ではあるが、その動作に淀みはない。

腰のハードポイントに納刀し、無頼はスライムが存在していた空間に背を向けた。

「てめえらのギグは気に食わねえんだよ」

スペーステンガロンハットが、風に揺れた。

「クソツクソツクソツ……！」

それは如何なる執念か。ほんの一滴ほどの身になりながら、スライム・ザ・リッパーは生き延びていた。

ディメンションモヒカンの壊滅を喜ぶ村人達の歓声が聞こえる。

「クソツクソツクソツクソツクソツクソツ……！」

スライムの命はここまでだ。すでに再生のエネルギーは尽きた。しかし、復讐しなければならぬ。可愛いモヒカン達と、己をこんな目に合わせた憎き怨敵を殺し尽くさねば、スライムの魂に平穏は訪れぬ。

「クソツクソツクソツクソツクソツクソツクソツクソツクソツ！」

その一念が動かめはずの身体を、死したモヒカンの頭にまで運んだ。全員のモヒカンリーダーは爆発し、脳を吹き飛ばしたが、スライムが辿り着いたモヒカンは比較的損傷が軽かった。

「先生え……！」

スライムの怨念に満ちた声が、リーダーに付随する通信機を通して、宇宙へと電波に乗り発信された。

「先生え……！」

死ねぬのだ。このままでは死ねぬのだ。その一念はすでにエ
ネルギーが完全に尽き、存在が霧散するはずの液体の身体を繋ぎ止
める。

「先生え……！」

答えはない。しかし、スライムは通信機の先にいる誰かを、確
かに感じた。

「先生え……！　お願いします……！」

ぶつん、と音を立てて通信が途切れる。

「ヒャ」

楽しげに、スライムは笑った。

「ヒャッハー……！　これで、お前達はおしまいだ、クソども！」

風が、吹いた。

スライム・ザ・リップパーが存在していた痕跡は、すでに残ってい
なかった。

斬・剣・Rock（後書き）

用語解説

・ギグ

小さなライブハウスなどでの短いセッションを行う事。

最近では死語となりつつある気がする。

せいぜいストリートで使っているくらいだが、使う人は使っている。

イカれたあいつとヘタレのリーゼント

日は沈み、辺りは闇に包まれている。スライム・ザ・リップターの起こした爆発で怪我を負ったクラリスは、誰にも言わずに村の外に出てきていた。

背後ではまだまだ騒ぐ村人達の声が聞こえる。

それもそのはず。ディメンションモヒカンを倒したお陰で、村を脅かす存在が消えたのだ。賞金首だった彼らの死体を星間カウボーイに引き渡すだけで、村が一年は遊んで暮らせるだけの金が入るだろう。

それだけの金を、あのスペースステングロンハットの男がどうするかはクラリスにはわからない。しかし、金に拘らず、下手をすれば村に全てを投げ出してしまいそうな雰囲気すらあった。

そんな事より、クラリスには考える事がある。

「どうして……皆、おじいちゃんが死んじゃったのに、楽しそうに出来るんだろう」

死ぬ、と言われた。それは確かにクラリスの心へと、深く突き刺さる言葉になった。

しかし、それよりも村長として村を守らなければならない、という義務感だったからなのを、クラリスは知った。

最後に見た村長の顔は、優しかった頃のおじいちゃんの顔だったと、はっきり覚えている。恨むには、思い出が有りすぎた。

そんな村長の死を忘れたように騒ぐ村人達との温度差を、クラリスははっきりと感じていた。

「もし私があの時、殺されてたら……」

少しの間だけは悲しんでくれるだろう。しかし、こうやって、何もかも無かったように上書きされてしまうのだとしたら。

「寂しいなあ……」

夜空には丸い丸いお月様。 クラリスは涙が零れないように、上を向いて歩いた。

今の今まで忘れていたような、村長との思い出が脳裏に流れる。いつか自分もこうやって思い出にされる時が来るかと思えば、それもまた寂しい。

ぽっかりと胸に穴でも空いたような気分は、このままどこかに行ってしまうか。 そんなやけっぱちの思考に流れる。

あの地平線の向こうには、何があるんだろう。 幼かったクラリスは考えた。

そして、何もない事を今のクラリスは知っている。これから先のクラリスは、この赤い荒野に何を想うのだろうか。

「どうなんだろうね？」

「……何がだよ」

ただの自問に、ふてくされた子供のような声が返ってきた。

そちらを見てみれば、リーゼント。 まるで塩をかけたロンリーほうれん草のように、しおれたリーゼントが地面に足を放り出して座っていた。

「……どうかしたの、サブ……さん？」

「ア？ 別にどうもしてねえよ。 つーか、さんはいらねえ。 ……ただのサブでいい」

恐る恐る声をかけてみれば、乱暴な言葉だと思っていたよりも優しいような声音が返ってくる。

「うん、じゃあサブって呼ぶね。サブはこんな所でどうしたの？」

「……うるせえな、姉ちゃんには関係ないだろ」

まさに拗ねた子供だった。少しムツとしたクラリスは、子供に言い聞かせるように言ってやる事にした。

「クラリス」

「あ？」

「ク・ラ・リ・ス。姉ちゃんじゃなくて、クラリス」

「……………別に姉ちゃんでもいいだろ」

「ク！ ラ！ リ！ ス！」

サブに詰め寄ると、一文字一文字をはっきりと理解出来るように、耳の穴に叩き込んでやった。

「わ、わかったよ、クラリスの姉ちゃんだな！」

「よろしい」

少し満足したクラリスは、サブの横に腰を下ろす。サブは少し嫌そうな顔をしたが、気付かなかったふりをした。

しおれたサブとクラリスの温度差は遠くはない。

「あのさあ、サブ」

「んだよ」

「助けてくれて、ありがとうね」

モヒカンに襲われた時、村長に死ねと罵られて泣きそうだった時、スライム・ザ・リップパーが起こした爆発に巻き込まれた時。

たった一日で三度も助けられた。命の恩人だ。

その想いを伝えるにはどうしたらいいかを考えた。しかし、結局はシンプルな一言になってしまったが、その言葉にはしっかりと想いを乗せた。

「よしてくれ。俺はクラリスの姉ちゃんに礼を言われるような事は、何一つしてねえよ」

しかし、クラリスの言葉をサブは蹴り飛ばした。しっし、と手を振り、さも迷惑だと言わんばかり。

「俺は兄ィがいたから動けただけだ。兄ィが助けてくれると思ってたから、クラリスの姉ちゃんを助けに行けたんだよ」

虚飾を剥いだ下には、深い自嘲。自分自身をサブは鼻で笑った。

「情けねえだろ？ ツッパってはいるけど、兄ィがいなきや足が震えて動けねえようなチキン野郎なんだぜ、俺って奴は。あのスライムって外道以下だぜ」

情けない、とクラリスは思った。自分を自分で貶めているサブは怒りを覚えるほど情けない。

「笑ってくれていいぜ、クラリスの姉ちゃんよ」

その横っ面にクラリスは思いっきり平手を叩き込んだ。
ぱしん、どころではなく、バチン！と派手な音を立てた平手はきっちり振り抜く。辺境生まれの女の腕力は、気を抜いたガキ一人程度なら地面に転がせる。

「あのさ、サブ」

地面に倒れるサブを見下しながら、クラリスは言った。

「The Sun reached from the west
sinks to the east」

「は？」

いきなりよくわからない言葉を発したクラリスを、ぽかんと口を開いて見上げるサブ。

「テラって知ってる？」

「バ、バカにすんなよ。人類が生まれた場所の事だろ。それがどうしたんだよ」

「今のはテラの言葉だね。『それでいいんだ』って意味なんだって」

あ、とクラリスは思った。あの言葉を教えてくれたのは、おじいちゃんだった。

「サブ、あんたは怖い我慢して私を助けてくれたんでしょ？」

おじいちゃんは死んだ。だけど、

「それでいいんだよ、サブは」

こうやって落ち込んだ誰かを助けてくれる言葉を、クラリスに残してくれた。クラリスが死んでも、サブがいつかクラリスを思い出して、この言葉を使ってくれるかもしれない。

それはきつとおじいちゃんが生きた証拠で、クラリスが生きた証拠なのだろう。

ぽっかりと開いていたクラリスの胸に、何かがすんと落ちた。

「……ありがとよ」

照れくさそうにそっぽを向いて、それでもサブの目には確かな光が蘇った。

感謝するのは自分の方だ、と思いながら、じめじめとした空気を吹き飛ばすようにクラリスは言ってやった。

「あ、でも、男が弱いのはちょっとね。やっぱり女の子を守る人じゃないと」

「ん、んだと!?! 俺は弱くねえよ! あ、あれだ……実はさ、俺」

二人は同時にそこを見た。夜より、なお暗き影がそこにいた。スライム・ザ・リップパーを悪の陽とするのなら、この人の形をした影は悪の陰。

闇より深い黒装束。ただ一つ外界に晒しているのは、稲妻のように鋭い目。しかし、ただ荒れ狂う稲妻とは違い、風の湖面のように静かな眼光。

その目がクラリスには何よりも恐ろしい。影は何の感慨もなく、クラリスを殺すだろう。

クラリスは誰かに何かを残す事もなく、死ぬ。人に殺されるなら、まだ救いがある。

だが、この影には何もない。

「……サブ」

冷たい殺気を受けて腰が抜けて立てぬクラリスの前に、サブが立った。

その足は無様に震え、しかし、それでもしっかりと立った。

「逃げろ、逃げて兄ィを連れて来てくれ」

「サブは!？」

「伊達に兄ィと旅してるわけじゃねえ、時間稼ぎくらいなら出来るさ」

だけど、とサブは言葉を切った。

「あれは……N I N J Aだ。俺がどうこう出来る相手じゃねえよ」

N I N J A。最古の暗殺者と呼ばれる彼らは、一騎当千を体現する存在である。惑星間を素早く駆け抜ける脚力、全てを見通す魔眼、摩訶不思議なN I N術。その全ては敵対する全てを殺し尽くす。

「安心しろ、小僧」

その声を聞くだけで、クラリスの脳は死を覚悟した。サブの背に隠れていなければ、それだけで死んでいたかもしれないほどの殺気。

「我は強者との死合のみを望む。スライムを倒した者を連れてこい」

「はっ！ そんな事を言ってもわかってるぜ。てめえらN I N J

Aは寄ってたかって一人をなぶり殺しにするんだろ」

NINJAはその力に驕る事なく、必ず複数のNINJAがターゲットを仕留めるのだ。そこには僅かの情も存在しない。

そして、だからこそサブは気付いた。

「否」

当たり前の事を当たり前に言っているかのような、なんら気負いの無い声。

「我が最強は我のみで証明されねばならぬ」

しかし、その内容はクレイジー。戦えば痛い。訓練は辛い。

戦いは野生宇宙生物ですら、何かを得るためにする物だ。

それを戦うために戦うと言い切るこのNINJAは冷静にイカれているとしか言いようがない。

「くそっ……！」

そもそも仲間がいれば、こんな下らない問答などはない。気付く間もなく、二人は殺されているだろう。

つまり、この影は一人。その事実サブに最悪の現実を教えた。くれた。

「てめえ、抜けNINか……！」

「ああ」

SINOBIの技は門外不出。　　もしも、NINJAが逃げ出せ

ば必ず追っ手が差し向けられる。

単独行動をしているNINJAがいれば、それは下らぬ騙りか、一騎当千を返り討ちにし続ける一騎当万のみ。

この威圧感、間違いなく騙りではない。

「よくと考えれば強者を呼びに行くのは一人で充分だ。片方は残り、我の玩具になれ」

そして、この気まぐれさは抜けNINでもなければ説明がつかない。もし、こんな遊びが過ぎるNINJAがいれば、仲間から粛清されてしまうだろう。

「クラリス姉ちゃん、行け」

「む、無理……」

気付けばクラリスの下半身は生暖かい物に濡れていた。尿である。

「早く！」

「無理い!？」

モヒカンなどとは比べ物にならぬ圧力は、クラリスの身体から根こそぎ力を奪った。死んだふりをして、猛獣から逃れようとするかのように。

「ふむ、飽きたな」

しかし、それは逆効果。NINJAは一瞬にして言を翻した。

「どれ、少し遊んでやろう。

男、貴様が死んだら、女を殺すぞ」

「やるしかねえのか……！」

サブは、覚悟を決めた。

イカれたあいつとヘタレのリーゼント（後書き）

用語解説

・テラ

人類発祥の惑星と呼ばれているが、その実在は確認されていない。
「人類は同時多発的に発生した」という学説が主流であり、天国や地獄の実在と同じ程度の確率でテラが存在していると考えられている。

交差

「さ、ゆるりと殺し合おうか」

先に動いたのはN I N J Aである。と、いうよりもクラリスを背に守るサブには動きようがない。

それに気付いたクラリスは這ってでも逃げようとするが、N I N J Aの疾走に比べれば話にならない。

「動くな、クラリスの姉ちゃん！」

「ひっ」

「おっと、先に女を狙ったのがバレていたか」

「わざとバラしてるくせにふざけんな！」

サブとクラリスにしてみれば、絶対の殺し間に落ちたような物。しかし、N I N J Aからすれば兇戯にも等しい。

「殺気くらいは読めるか。いいぞ、装備に頼るだけの雑兵ではないだけマシよ」

クラリスに向けていた殺気をN I N J Aはサブに向け直した。敢えて見せびらかすようにして、殺気に向けてみれば、サブの震えが止まった。

N I N J Aからしてみれば意外の一言。殺気に向けられ、震えが止まるなど理解の範疇にはない。

そして、そんな事はどうでもいい話だ。

「まず一手、凌げよ」

疾走をびたりと止め、両手を振るえば電磁苦内が一本、レーザーガンにも勝るとも劣らぬ速度でサブの脳天に飛んで行く。

「ナメてんのか！」

しかし、サブとて無頼と共に旅する者である。そのくらは頭を倒すだけで避けてみせる。

「おお、ナメておるわ」

一本、避けた。しかし、サブの身体はその先の危機を見た。飛来する電磁苦内は一本。

そして、空気を切り裂く音は三十二。三十一本はどこに。

脳が考える間にサブの身体は、動いていた。

抗磁場アロハを一瞬にして脱ぐと、叩き付けるように振り回す。するとどうだ。アロハにぐっとかかる重みが生まれたではないか。

「ふむ、この程度は凌ぐか」

見せ札の電磁苦内を避ければ、次に控えるはステルス苦内というえげつない罠を、この程度と言い切るNINJA。

対するサブはアロハを脱ぎ捨てた上半身に、滝のように流れる汗。僅かの間で磨り減った精神が、肉体に防御反応を起こさせたのである。

「どれ、二手目と行こうか」

電磁苦内、その先にはステルス苦内。初見で攻略した技をサブは容易く、六十の苦内を受けたアロハと引き換えに避けた。
しかし、

「それは悪手」

苦内だけならそれでいい。しかし、アロハを振り切ったせいで、無様に崩れた姿勢は次のNINJAの一手には対応出来ぬ。

まさに疾風迅雷としか言えぬ瞬時の踏み込み。サブが気付いた時には、NINJAの声が背後から聞こえていた。

「嘖ッ」

まるでスーパークのように、サブの身体が地面を勢いよくバウンド。一、二、三、四、五、六とサブを転がしたのは、ただの筋肉の膨張であった。

脱力し、収縮していた筋肉を爆発的に膨張させ、サブを跳ね飛ばしたのだ。

しかし、そんな事はクラリスにはわからぬ。ただわかるのは、ソニックエアカーに轢かれたような勢いで吹き飛ばされたサブが、すでに生きていないであろう事だけ。

「あ、あ、あ……！」

「ふむ、なかなかよい師がいたようだな」

「うるせえ、死ね！」

しかし、クラリスの予想とは違い、弾き飛ばされた勢いに倍する

速度でサブは戻ってきた。

その速度がサブの振りがぶった拳に乗る。百獣の王エンペライオンでも、サブの拳の前には道を譲るだろう。

「三手、覚悟を決めろ」

ソニックブームすら起こすサブの拳に、いっそ優しくすら思える手付きでNINJAは触れた。

音速超過の一撃により速い速度であっさりと触れた上、完璧に力をコントロールする余裕すらあるのである。

触れた部分からサブの力のベクトルは変化。打ち込まれた杭にぶつかる水のように、明後日の方向へと身体が流れた。

「なっ!?!」

「まずは腹」

鈍い、とても鈍い音がした。腹筋にぶち込まれたNINJAの拳を起点に、サブは口から反吐を撒き散らしながら、くの字に折れ曲がる。

「顎」

まるで稽古でも付けられているとしか思えぬ扱いに、屈辱を覚えている暇はサブにはない。

動かぬ身体に鞭打って、サブは顎の下に手を滑り込ませた。

それを待っていたかのように。いや、事実待っていたのだろう。NINJAの半月を描くサマーソルトキックが、サブの顎をかち上げた。

「ふむ」

と、N I N J Aはそこで動きを止めた。地に倒れるサブを見下し、それでありながら、どこか興味深そうに見た。

「お主、無手の使い手ではないな」

明らかにおかしかった。今も常人であれば、とっくに絶命している猛攻を受けながら、三を数えるまでもなく起き上がってきている。

それだけの鍛え抜かれた身体を持ちながら、気の利いた技の一つくらいはあるはずだ。先ほどの拳は勢いはよし。しかし、技の煌めきの欠片もなかった。

「けっ、うるせえ」

立ち上がるサブに、N I N J Aは脇差しを抜いた。

「使え」

「いらねえよ」

「我が使えと言っている」

「いらねえって言ってんだろ」

「……そうか」

と、僅かにN I N J Aは俯き、一瞬の間が生まれた。

「使え」

その間はサブの油断を生んだ。脇差しが紫電のようにサブの胸へと飛ぶ。

僅かな油断と、人体で最も避けにくい身体を中心、正中線上に投げられてしまえば、避ける間はない。ならば、掴み取るしかない。

「握ったな」

「てめえ、それだけのために……！」

わざわざ柄側が当たるように投げた脇差しは、しっかりとサブの手に握られた。

「次は四手。 見せてみる、お主の技を」

経過を経ずして、結果のみが現れる。 地を縮めたとは思えぬ踏み込みは、サブの右手側にN I N J Aを運んだ。

サブの膝下よりも深く身体を沈めたN I N J A、最初の一手はスプリング大蛇が身を起こすような拳。

地を削るほど下から、そして天を突くようにして放たれるアップーカットである。

「っ！」

避けられはしない。 先ほどまでの攻防で、サブの回避は見切った。 ならば受けるしかない。

そして、サブが真に剣士であれば、いくら脇差しを手放そうとしても、その身に迫る死を前に身体が動くはずだとN I N J Aは判断した。 間違っているのであれば、相手が死ぬだけだ。

期待は見事に応えられた。

柄尻で逆に殴りつけるようにして、拳を防御。これがN I N J Aの拳でなければ、拳が破壊されていた。

二手目。柄尻で打たれた反動を拳から肘に流せば、それは力となる。上半身を力に逆らわず、前に倒す。

手を地面に着き、背を向けた逆立ちのまま足をサブの首に伸ばせば、横薙ぎの刃が振られる。

もし、地面に着いた腕を曲げていなければ、N I N J Aの足は斬られていただろう。

三手目。ぬるりとした動きで、サブの足に手を伸ばした。僅かにでも触れられれば、経穴を突き、足どころか全身を麻痺させる。しかし、サブは完璧な運足を見せた。身体の軸に一切のブレはなく、大きく後方に下がる。

それは刀の距離である。

自らの慧眼に歓喜を得たN I N J Aは、とりあえずとばかりに四手目。やる気の欠片もなく、五十ばかりのステルス苦内を投げつけた。

なかなかの剣士だ。こんな物はあっさりと避けてくれるに違いない。

そんな奇妙な信頼が、N I N J Aの中に生まれていた。

しかし、

「ゲエエエエ……！」

信頼した剣士は身を折って、反吐を吐いていた。

「貴様、ふざけているのか!？」

あれがフェイクのはずはない。 そんな意味はない。 必ず当たる。

ステルス苦内はサブの身体を貫通し、穴だらけにするだろう。
何という無様な終わり方か。 燃え始めたN I N J Aの魂は、どこにぶつければいいのだ。

問答は、無かった。

N I N J Aの踏み込みに負けず劣らず。 いずこから現れたスペーステングロンハットの男が、刀を振った。

愚かな若い剣士に向かっていったステルス苦内は、たったの一振りで全てが斬り捨てられた。

――強者。

これこそがN I N J Aの求めていた相手。 N I N J Aは足を踏み出した。

逆立ちの姿勢のまま、足を踏み出した所で何の意味もない。 そう思うのは常人である。

宇宙空間を走るN I N J Aにすれば、惑星の重力圏内は足場に不自由する事はない。

何故なら大気がある。 大気を足場とし、踏み込んだN I N J Aの速度はサブを相手にした時よりも上がっていた。

下から上に、上から右に。 スペーステングロンハットに向かい、弧を描くように、時には鋭角に、N I N J Aはランダムな軌道を描きながら加速した。

そんな揺さぶりに動じる事のないスペーステングロンハットの男は、どうしようもなくN I N J Aの身を熱くさせる。

交差。

スペーステングロンハットの一撃は、N I N J Aの魔眼をして見切れず、N I N J Aの一撃はスペーステングロンハットをして見切れず。

N I N J Aは腹を薄く斬られ、スペーステングロンハットは左足を浅く刺されていた。

「その風体、ナルカミ・ブンタか！」

「そういう貴様は飛びカトウ！」

交差。

一瞬の間に七つの傷を得て、同じだけを返す。

「知っているぞ、ただの刀を担いでの、レーザー柳生百人斬り！」

「そんな古い話は忘れた！」

交差。

六を得て、八を返した。

「ああ、そんな事よりも今だ！」

「最近のN I N J Aは随分と口数が多いんだな！」

交差。

十三を返し、零。

N I N J Aは動きを止めた。 これだけの使い手が、ただ受けに
回るはずがない。

一撃を、狙っている。

僅かな優位に溺れ、最後の一撃を相手に与えるわけにはいかない
のだ。 赤く燃えたぎる心はそのままに、ただその身の欲するがま
まに動く。

全身を極限まで脱力。 最後の交差に備える。

「サブ」

スペーステンガロンハットが、口を開いた。

「見てろ。これが俺の剣だ」

構えは上段。狙いは我が脳天。単純明快なその構えに、恐怖を感じる。

「我が電光石火、捉えられるか」

ブラックホールに飛び込む方が、まだ生き残れる。そんな相手を前にして、つい口を開いてしまった。

それは恐怖ではなく、歓喜を共有して欲しいという欲であった。

「御託はいらねえよ。来い」

その望みは叶えられた。スペーステンガロンハットの剣が、そう言っている。

だから、脱力、緊張。飛びカトウの人生最速の踏み込みが始まった。

左足があまりの負担に血を噴き出す。しかし、すでに右足の踏み込みに移っている。最新の大型リーダーでも捉えられぬ速度を得た。だが、飛びカトウの速さを、剣士の切っ先は捉えていた。

———斬られる。

飛びカトウは自らの死を、そこに見た。

「NIN！」

「感謝するぞ。お主のお陰で……我は更に強くなれた」

仰向けに倒れるスペースステンガロンハット。その胸にはN I N
J A 刀が深々と突き刺さっている。

「嘘だろ……」

「もし、その男が傷を負っていなければ、敗北していたのは我の方
だった」

スライム・ザ・リッパーを相手にした負担は重かったらしい。
身体中の筋をずたずたにされていた。

しかし、その最後の剣はカトウの覆面を切り裂き、誰にも見せた
事のない素顔を晒させた。

「嘘だ……兄ィが負けるはずない！」

「我の、勝ちだ」

飛びカトウの勝ち名乗りが、荒野に響いた。

スペースチャンバラNo. 1

「兄ィ！ 兄ィ！？」

飛びカトウにも死に逝く者が最後に言葉を残す時間を、与えるくらい
の情けはあった。

必死にブンタの肩を揺するサブの気持ちはよくわかる。自分が
手を下したとはいえ、この恐るべし強敵がいなくなるのは惜しい。

「兄ィ！ 兄ィ！」

「うるせえな……耳元で騒ぐな」

肺と心臓を潰した。それは確かな事だ。動いて話せるのは道理に外れる。

しかし、ブンタほどの男が、動けぬ理由ではない。

だが、その顔にははつきりと死相が出ている。今からどんな名医が治療を行っても手遅れだろう。

「サブ」

泣きじゃくるサブにブンタは静かに声をかけた。

「なんだよ、兄ィ！」

「今からお前は独りだ」

いやいやとする子供のように首を振るサブの肩に、ブンタの厚い
手が置かれる。その手には死の淵にいる人間とは思えないくらい、

しっかりと力が籠められていた。

「俺がお前にくれてやれるモンは、全部くれてやった」

「無理だよ、兄ィ！　俺なんか独りじゃ無理だよ！」

「サブ」

必死に泣き喚くサブを黙らせ、ブンタは言った。

「男がめそめそ泣くんじゃねえよ」

それっきりブンタが動く事は、なかった。

どれほどそうしていたのか。　飛びカトウも、サブも、クラリスも動かなかった。

ただ泣きじゃくるサブだけが、場の音を作る。

泣けばいい、と飛びカトウは思った。　ブンタの跡を継ぐ者は、きつと強くなるだろう。

そして、いつか自分の前に彼が立つ。　それを考えれば、心が軽くなった。

「去ね。 もうお前らに用はない」

殺す気はとうに失せている。

「……お前は」

「黙れ」

しかし、殺す気は残っている。

「弱者と語る舌を我は持たぬ」

散々、なぶった後で何を今更。 そう思わなくてもないが、彼には自分を追ってきてもらわなければならない。

そして、殺す。 殺されるのだ。

「どけ」

「何をするつもりだ」

サブの眼から怯えが消えていた。 揺らぎが消えていた。

「強者を倒した証に、そのスペースステンガロンハットを貰って行く」

目印だ。 いつの日かこの男が自分を追うために、はっきりとした目印が必要なのだ。

「……お前は」

「む?」

「お前は何のために戦ってんだよ」

「強者との戦いのため」

狂おしいまでの飢えがある。 金も女もその飢えを満たす役には立たない。

「そうか」

と、サブは言った。

「なら、あんたにゃこいつはやれないな」

そう言うどブンタの刀を握り、サブは立ち上がった。
思わず見惚れてしまうほどに、美しい上段の構えだった。

「兄ィのスペースステンガロンハットを、あんたに汚させるわけにや
いかねえ」

「はっ」

思わず自分が笑っていた事に、飛びカトウは気付いた。

小僧が大口を叩いた事に、ではない。すでに完成した剣士を見
誤っていた自分を笑ったのだ。

「もう反吐は吐かんのか？」

「昔、ちよいと色々あってよ。でも、俺は無頼だ」

頼る者無し。ブンタの庇護を失ったサブは、正真正銘の無頼となった。

「兄ィの顔に、泥を塗るわけにはいかねえ」

曇りなき眼が、飛びカトウを射抜く。

「斬るぜ、あんた」

「面白い」

子猫だった相手が、僅かな時間の間で獅子になっていた。殺したくはなかった。

しかし、そんな甘さを持ってしまえば、この獅子の牙は飛びカトウに届くだろう。

「名を、聞かせてもらおうか」

「レーザー柳生宗家が嫡男にして、ナルカミ・ブンタが弟子、ヤギユウ・サブロウタ」

「コズミックIGA抜けNIN、飛びカトウ」

そして、

「参る」

と、どちらが言ったのか。

飛びカトウはただ一直線に前に出た。

「見事」

ブンタとの決闘で傷を負っていないなければ、と一瞬、思ってしまった。しかし、それもまた、

「未練よな」

最強の名を欲しいままにしていた飛びカトウは、ここに散った。

「本当にもう行くの……？　まだ怪我也治っていないだし、一晩だけじゃなくて、もう少し休んで行ってもいいんだよ」

晴れ渡る空。　空気は澄んで、どこまでも遠くが見える。

そんな中、サブロウタとクラリスは村の入り口で、別れを惜しんでいた。

「ああ、もう充分だ」

「嘘だよ。その眼だってさ……」

サブロウタの左の眼に深々と斬られた傷があった。この辺境の村ではナノマシンで傷口を治す事しか出来ず、再生は不可能だった。しばらく待てば再生してくれるであろう、無医村を回る巡回医が来る。その事を踏まえた上でクラリスは言った。

「いいんだよ、これは再生しない」

「でも！」

「いいんだ」

サブロウタは、クラリスが初めて出会った時の騒々しさが鳴りを潜めた、透き通った笑みを浮かべていた。

何かを背負い、何かのために生きるのだろう。その生き方は美しく、悲しい。

「……馬鹿」

「そうだな……ありがとうよ、クラリス」

あの日からサブロウタから、姉ちゃんという言葉が消えていた。サブロウタは無頼になった。それは誰にも頼る事の無い孤独な旅路。

それはクラリスにもわかつている。

しかし、

「馬鹿サブ！」

「ぐおっ!？」

辺境の女の腕力は、別れの場面でも強い。腰の入った平手打ち
は、サブロウタに避ける事を許さなかった。

「この私を呼び捨てにするとは、いい度胸ね！」

「なんで今更、キレてんだよ!？」

「うるさい！ 黙りなさい！」

自分で打ったサブロウタの頬に、クラリスは優しく手を添えた。

「クラリスの姉ちゃん」

「いや、でも」

「あんたはサブ」

「俺はさ」

クラリスはぎゅっと力を籠めて、サブを抱き締めた。

「それで、いいのよ」

サブロウタは無頼だ。しかし、それではあまりに寂しいではないか。

せめて、自分くらいは疲れたサブが、寄りかかる場所になってあげたい。そう、クラリスは思った。

「……ああ、そうだな。クラリスの姉ちゃん」

「うん……」

だが戻って来る事は、きつとないだろう。サブの選んだ道はそういう道だ。

クラリスは抱いていた腕を離すと、湿っぽさを吹き飛ばすようにして言った。

「ほら、これお弁当とおじいちゃんが漬けたモグの実！ とっても美味しいんだから、よく味わって食べなさい！」

「ありがとうよ、クラリスの姉ちゃん」

弁当を受け取ったサブは透き通った笑みでも、子供っぽい笑いでもなく、男の笑いをしていた。

溢れそうになる涙を、必死にこらえた。

「行ってらっしゃい、サブ！」

「達者でな、クラリスの姉ちゃん！」

背を向けたサブは、すでにアロハではない。

青空のような青地に桜の花びらが散る着流し。リーゼントの代わりにはスペーステンガロンハット。その背中には影のような黒

で『無双』の二文字。

腰にぶち込まれた刀一本、サブは、サブロウタは旅に出る。

それは、男の旅立ちだった。

読む必要のないあとがき

余韻を壊したくない方はバックしてください。
せいぜい軽い設定資料みたいなものですので。
ここまで読んでいただいて本当にありがとうございました！

と、いう事で無事、完結！

毎回、最終回書きたくない症候群や、何かもう書きたくない症候群に陥る私にしては、すばつと終わりましたイエーイ。

さて、スペースチャンバラNO. 1ですが私としては妙な作り方をしました。

普通ならうっすらとストーリーを作り、キャラ作り、そこからストーリーを作る工程をするんですが……まずあったのはスペースステングロンハット。

この珍妙なネーミング一つから始めました。

なんぞこれWWWというノリで書いたら、あら不思議。

一気にストーリーとスライム以外の全キャラが完成してしまった、という妙な話です。しかし、これが書ける私が盗作なんざする必要はねえ、と自負してやる。ふあっくん。

つーことで毒吐いた所でキャラについて。

・デイメンションモヒカン

説明不要のヒヤッハー要員。死ぬために出てきました。以上。

・スライム・ザ・リッパー

登場シーンは無駄に楽しかったですが、噛ませ犬です。以上。
お気に入りのキャラですが、噛ませです。

・ブンタ

サブと一緒に裏設定とか旅の目的とかありますが、それは出しません。

イメージは「私の考えた兄貴」

格好よく書いたつもりですが、どうでしたでしょうか？

・サブ

逆に「兄貴の下にいるチンピラ」以外の何者でもないですね。

無頼という言葉一つでラストが決まりました。

どうでもいいですが漢字で書くと「三六汰」になります。

三十六で九。 柳生十兵衛から一足りないくらいのカヤラにしよう、
という意味があったり。

・飛びカトウ

最初は飛びKATOUでしたが、さすがになーと自重しました。

今にして思えばやらなくてよかった気がします。

ラストは構成ミスった気がしてなりません。

私の力不足です。

もっとしっかりと書いてあげたかった。

最終話を一万文字書いた所で、連続でガッチガチにバトルさせると
重くなり過ぎると思って、泣く泣くカットしました。

・クラリス

舞台装置「導入の村娘」から妙に動いて、出番を獲得していました。
弱々しい子の設定はどこに消えた。

毎回、絶対に私の予想外に動く子が出るから書くのは楽しいですね。

と、いう事でスペースチャンバラNO. 1、短い間でしたが楽しん
でいただけたでしょうか？

私は書いてて楽しかったです。 が、同時に自分の弱点もはっきり
見えた気がします。

反省点を次に生かし、もっと面白い物を書けるように努力いたしま
す。

繰り返しとなりますが、ここまで読んでいただき、本当にありがと
うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2419y/>

スペースチャンバラNo.1

2011年11月18日05時10分発行